
過去に何があろうとも自分を想わない家族はいない・・・と思う

篠原 つぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去に何があるうとも自分を想わない家族はいない・・・と思う

【Nコード】

N5280P

【作者名】

篠原 つぐみ

【あらすじ】

2人が付き合いだし家族が和解し・・・

ある日、学校は休みだったものの就活準備にいつもの駅に用のあった麗無。

「おはよ」

突然話しかけられた。少し驚いて隣を見ると、また妹に会いに行くのだらう。

不思議少年柳枝がいた。

「あ。柳枝君。おはよ。」

「今日も学校・・・なの？」

「ううん。ちよつと用があるだけ。学校は休み」

「僕は妹に」

「分かるよ。今までずっとそうだったじゃん。でも・・・大丈夫なの？」

「え？」

「お父さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの人は父さんなんかじゃない。」

「でも・・・」

「前家で妹から聞いたろ。血の繋がりもないタダの意地悪だ。」

「柳枝君・・・そんな言い方は・・・しない方が良いんじゃない？」

珍しく怒った柳枝。怖い

「君に何が分かる！会ってたかが何週間かそこら先週家のことを聞いただけの君に・・・」

家の何が僕らの何が！」

少し怯える麗無。

「柳枝・・・君・・・」

しかしここで弱気になどなっていられない。

「分かんないよっ！だって柳枝君・・・一緒にいたって自分のこともそういうことも

何にも話してくれないのに分かるわけない！でも・・・」

「でも何だよ」

「どんな理由があつたのかは昨日妹さんから聞いたことしか分からないけど・・・

お父さんはお父さんじゃない！」

「・・・何度も言わせないでくれ。あんなオヤジさんなんかじゃ・・・」

「柳枝君・・・」

駅に着く。柳枝に着いていくことにした麗無。

・・・
・・・

いつものようにマンションまで無言。

柳枝は突然固まり動揺を見せる。

「・・・何・・・で・・・」

柳枝の見つめる先には信じがたい光景。

仕事に行っているはずの男がノブに手を触れていたのだ。

「あ……」

こちらに気づき見てくる男。

「……………はあ。」

突然深いため息。そして……

「とつと入りやがれ。……このバカ息子」

驚く柳枝。

「……………僕はアンタの息子なんかじゃない。アンタの娘の元兄。ただそれだけだ」

「親父を認めねえってか……んなバカ息子に育てた覚えは」

「アンタは僕を育てちゃいないだろ。」

育てるところか何度殺されかけそうになったことが」

柳枝は腕をまくる。無数の傷。麗無は思わず目を閉じる。

「酷い目にあつたもんだ。アンタにやられた数々……一生消えない。」

自分の子供にこんなことをする男を父親だなんて認めたい子がどこにいる」

その傷を見つめ……怒りか悲しみか憐れみか……分からない目を見せた男。

「・・・悪かったよ！」

珍しく男を恐れず睨む柳枝。

「それで謝ってるつもりか。僕はアンタを父親だなんて絶対に認めない。」

僕がここにきてるのはアンタに会うためでも伯母さんに会うためでもない。

妹に会うためだ」

「家族だろ」

「その家族を壊したのはアンタだ。忘れたのか。」

妹だけを引き取り愛娘とし兄貴は虐めて捨てた。それが現状だろ」

男はハツとする。それもそうだ。

幼い柳枝に数々の暴行を繰り返し妹を引き離していったのは他ならぬ自分だった。

姉である彼らの伯母の意見も聞かずに。

「・・・んな昔のことまだ引きずってたのか。小せえ男だな。オレの息子の癖して」

「アンタ・・・ボケたか？何度言わせれば気が済む。」

僕はアンタの息子なんかじゃないと」

突然柳枝を片手で抱き寄せる男。

「何すんだ離せ」

「悪かった。てめえはアイツに似てる。そっくりだ。外も内も。」

あいつの分身みてえなやつだ。」

「母さんの事か。あんたは母さんが好きで再婚したんじゃないのか」
「な訳あるか。あんな・・・」

「なら何で付いたんだ。何かに利用するためか」

「仕方なかったんだ。」

「仕方なしに男のガキを虐めて女のガキを愛したのか？」

何も言えない男。

「あんたは母さんを苛めてなどいなかった。皮肉は叩いてたがそれはどこの家の

親父もすることだとあの頃は思ってた。忘れたなんて言わせねえよ。

あんたが僕を苛めるようになったのはその母さんが死んでからだ。

「ああ・・・そうだな・・・立ち話はなんだ。澄子の先輩もいることだし入れ。中で話すぞ」

「僕は帰る。」

「させるか。どうぞ」

呆気にとられていた麗無。

「・・・・え？あ！・・・ほら。柳枝君」

柳枝の背中を軽く押しながら家に入る麗無。男は扉を閉める。

応接室のソファにどっかりと腰を下ろす男。柳枝と麗無は並んで腰を下ろす。

義父子の睨み合いが続く。

「急にまた何のつもりだ。僕の顔を見て入れだなんて」

「家族が1つ屋根の下は当たり前だろ」

「驚いた。つい先週オレの娘に関わるなと僕を殴り飛ばしたのはど

この誰だ。随分と

早い気変わりだな」

「次から次へと憎まれ口を叩きよって。あの純情はどこ行きやがった」

「アンタが消した。」

思わずクスッと笑ってしまった麗無。柳枝が流し眼で睨む。

「何がおかしい」

「あ・・・いや。ごめん。別に」

そうは言ったものの、麗無は柳枝を「素直じゃないんだから（笑）」
と思っていた。

「・・・今日はメシ食ってけ。姉貴も交えて家族で話そう。」

「あの・・・私はそろそろ失礼します。」

「そうか。何も構えず悪いな。こいつをリラックスさせてやってくれるか」

「僕にはリラックスなんて必要ない」

溜息混じりの柳枝の一言。

「送ってく。」

「あ。いえ。大丈夫です。今日はバスでないので」

「そうか。また・・・いつでもな」

「あ。はい。ありがとうございます。」

家を後にし駅へと戻る麗無。家の中は義父子2人きりになる。

「澄子は」

「今日は部活だ」

「そうか」

「部屋を用意してくれ。家族は1つ屋根の下だろ？」

「ここ使え」

通されたのは1つの部屋。割とシンプルだが生活用具一式は揃っていた。

「ちゃんと用意してたのか」

「家族だしいつかはな」

男の話をほとんど聞かず柳枝は部屋にこもる。
息子と話せず応接室に1人きりの男。

しばらくして妹の声

「ただいま。って父さん！なんでいんの」

「休みだ」

「そ」

澄子はいつもの廊下を通る。1室に人の気配。

「ここは確か・・・」

ノック。返事はない。

「兄さん・・・いるの？」

扉が少し開く。間から手招き。澄子は中へ。

「兄さん・・・なんで」

「分かん。あの男が僕を入れた」

「父さん許してくれたの？」

「今夜家族で話そだと」

「良かったじゃ」

「良いもんか。僕はあの男を父親だなんて思わない。お前も前彼女に言ってたろ。」

父親だなんて認めたくない」と

「けど・・・兄さんも含めて家族でなんて。父さんは兄さんを家族にしたいんだよ」

「僕は違う」

「いい加減素直になりなよ。兄さんは私の兄さんだし父さんの息子私達家族だよ」

「血の」

「血なんて関係ない！血の繋がりなんかなくても家族にはなれるし家族！」

「どうだが。全ては今夜決まる。部屋に戻れ」

自室に戻る澄子。そして夕食時・・・澄子が兄を呼び兄妹は居間へ。話し合いが始まる。

「アンタ・・・家族とするんだね柳枝君を」

「そのつもりだ」

「あんたがそのつもりでも僕にそのつもりはない」

「ならなんで部屋なんか」

「今夜のこの話のためだ。一度帰るのも面倒だからな」

「兄さん結構くつろいでたじゃない」

「1人になれたからだ」

なかなか男と顔を合わせようとはしない柳枝。

「柳枝君」

「兄さん」

伯母と妹に後押しされ男を見る柳枝。

「……この家にいる。柳枝。スマン。今まで本当に酷く扱ってきた。家族だつてのに」

「……今さら過ぎる。いてやつても良い」

「家にいるのがガキの仕事だ。」

「僕はもうガキじゃない。働く頃だ。」

男は柳枝を許し謝り、家族4人1つ屋根の下で暮らすようになった。それから少しして突然……

「麗無。」

これには驚く麗無。

「え？柳枝君今何て？」

キョトンとする柳枝。

「麗無つて……呼んだただだよ。ダメだった？」

「ダメなんかじゃないけど……いきなり過ぎてビックリしちゃった」

「……そう。麗無」

「何？」

「今度さ……デートつての？しない？」

「え……？あ……うん」

「麗無：何か買いたい物とかある？行きたいとことか・・・」

「・・・特別欲しいものはないかな？」

「僕も・・・何もいらない。君がいるなら・・・何もなくても良いな。」

「柳枝君・・・」

「僕に・・・父さんと向き合う勇気をくれたのは麗無。君だったから。」

「私・・・何もしてないよ。柳枝君がお父さんと良くしたいって思ってたからだよきつと。」

「・・・君がいなかったら・・・僕はあの男を父親と認める気はなかった」

「柳枝君・・・」

「ありがとう。麗無」

そう言いながら微笑む柳枝の顔は、これまで麗無が見てきた笑顔の中で

一際優しい物だった。

「私も・・・」

「ん？」

「私も・・・柳枝君がいてくれるなら・・・何もいらない。」
お互い微笑む。

「でも・・・デートはしょ」

「柳枝君」

「何？」

映画のチケットを2枚出した麗無。

「これ・・・兄妹の映画なんだって。見てみない？」

「うん。そうだね。あ・・・」

「どうしたの？」

「おかしくない？この格好」

「何で？カッコ良いよ。柳枝君は元が良いんだからどんな格好も似合うの！行こっ！」

「うん。」

2人が見た映画は・・・

素直になれなかった妹が突然兄を交通事故で亡くし冷たい態度を兄に謝り、その死を悲しみ
苦しみながらも兄の思い出の笑顔を中心に生き続ける妹の話だった。

すっかり泣いてしまった麗無。

柳枝はギリギリ涙を目に貯め続けていたが・・・

一筋流れてしまった。

「なんか…情けないね。男が映画で泣いちゃうなんて」

「男の子だからって…泣かないより良いよ。素直で可愛い」

照れる柳枝。少し笑う麗無。楽しい時間は・・・

瞬く間に過ぎていった。

そしてその日別れの時・・・

「今日は・・・楽しかったね」

「うん。また・・・デート」

「静かなところで・・・2人で過ごすのも良いかもね」

「うん」

柳枝の家の前まで一緒に帰って行った2人。

そこで別れ麗無は駅へ。自宅へ帰って行った。

記念すべき初デートは感動映画。まずまずの好スタートだろう。

- - -
- - -
- - -

すっかり恋人になった2人。週1の2日だけではなく会う日数が増えてきた。

会う度に2人で静かに過ごしたり彼の家族と食事を共に楽しんだりデートをしたりと

満足な交際が続いていく。

お互い相手がそばにいてくれるだけで他には何も必要ないくらいに愛し合うようになったのだ。

その後も2人は順調に交際を進めて行った。

そして1年ほどした成人後。

麗無の両親の許しを得た柳枝は自分の両親に許しを得ようとする。

「・・・父さん。僕は本気なんだ」

「許さん！」

「お父さん。息子さんを大事に思う気持ちは分かります。」

ただ私は柳枝さんを心の底から愛しています。」

「まだ早すぎる！学生結婚など言語道断だ！柳枝だってまだ職すら働いてるさ。会社で」

「私は既に卒業しました」

「麗無さんのご両親は僕達の結婚を許してくれている。だからあとは父さんだけだ」

口を出してきた母に当る伯母。

「良いじゃないかアンタ。麗無ちゃんみたいなしっかりした綺麗な娘が柳枝君の嫁に

来てくれたら大歓迎さ」

「・・・母さん」

「あたしや伯母さんだろ」

「けど・・・母さんでもある」

「好きに呼べば良いさ。アンタ許しておやりよ」

「柳枝」

「何？」

「家庭を作って支えてく覚悟はあんのか？それがねえなら結婚は認められねえな。」

「覚悟もないのに許可取りなんかしない」

「……………仕方ないな」

ため息混じりの父。

「…麗無さん。柳枝をヨロシク頼む」

「はい！お義父さん！」

両家両親の許しが降り晴れて2人は結婚する事になった。そして翌年長女麗慈も生まれ幸せな家庭を築いて行った。

（後書き）

色々と急展開もありますがどうぞお楽しみください
www
www
www

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5280p/>

過去に何があろうとも自分を想わない家族はいない・・・と思う

2010年12月16日16時06分発行